

短草・若刈りによる牧草の高栄養化

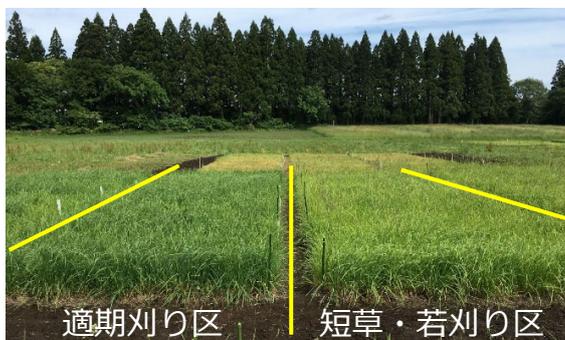
牧草を通常の収穫タイミングよりも早期に若刈りを繰り返す多回刈り収穫が、牧草の栄養価や収量、作業時間に与える影響を調査し、高栄養牧草の生産が可能であることを明らかにしました。高栄養牧草生産の参考にして下さい。

研究成果の概要

1 背景・目的

配合飼料価格が高騰していることから、高栄養な牧草を生産し、牧草からの牛の栄養摂取量を高め、配合飼料の給与量を抑えることが重要です。

そこで、通常の収穫タイミングよりも早期に若刈りを繰り返す多回刈り収穫方法について、牧草の収量、栄養成分、作業時間を明らかにしました。



適期刈り区(左)と短草・若刈り区(右)

2 内容

短草・若刈り（年6回刈り）では、通常刈り（年3回刈り）よりも、作業時間が1.5倍となり、乾草収量は14%減るものの、牛の栄養成分として重要である粗タンパク質（CP）含量は3.4ポイント、CPと乾物収量を掛け合わせたCP収量は9%高くなります。一方、消化性が低い繊維成分である酸性デタージェント繊維（ADF）含量は4.6ポイント、繊維成分の総量を示す中性デタージェント繊維（NDF）含量は7.9ポイント低くなり、高栄養・高消化性になることが確認されました。

短草・若刈りによる収量及び飼料成分、作業時間への効果

	刈取回数	草丈 (cm)	乾物収量 (kg/10a)	CP (%)	ADF (%)	NDF (%)	総作業時間 (分/10a)
短草・若刈り	6	54	709 (86)	13.4	27.6	48.6	18.9
適期刈り	3	86	825 (100)	10.0	32.2	56.5	11.8

()内は適期刈りを100とした場合の比率

注 CP:粗タンパク質、ADF:酸性デタージェント繊維(消化されにくい繊維成分)、

NDF:中性デタージェント繊維(総繊維成分)

3 活用等

- ・ 県関係機関に成績を公表し高栄養牧草生産の技術指導に活用されています。

関連情報

- ・ 高タンパク飼料である大豆かすを始めとする購入飼料が高騰している状況下で、高タンパク飼料を自給する有効な方法の一つです。

